猿新聞

編集・発行
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

野生動物との共生を考える

獣害は万葉集の歌の中にも語られているように、古代からありました。

「足日木之　山田守翁
置蚊火之　下粉枯耳
余戀居久」

「あしひきの　山田守る
翁が　置く鹿火の　下焦
れのみ　吾が恋ひ居らむ」

これまでも、野生動物の被害対策としては、駆除、防除、追い上げなど対症療法的に実施されてきておりますが、根本的な解決には至っていないのが現状です。

昔から里山では野生鳥獣との軋轢の中で人々の生活が営まれてきましたが、自然の動物の生息地と自分たちの生活域を巧みに棲み分け、野生動物と共生してきました。

猪が田畑を荒らすのを防ぐ為人々は集落と猪の生息域の境界に「猪垣」を作って侵入防止をし、むやみに殺傷することはありませんでした。

「棲み分けの知恵」を忘れてしまったことが野生生物との共生を難しくしてしまったのです。

私の子供の頃、香落峪の岩場に猿が生息していて、その一帯は香落峪の猿の生息地として開発される事なく、猿達も自然の恵み豊かなその地域から人里へは下りてくる事はありませんでした。

然し、最近は頻繁に集落へ侵入し柿・蜜柑等の果樹や畑の野菜類を荒らしまくり、当初は人を見ると逃げておりましたが、最近は逆に猿の方が威嚇するまでの事態が起こっています。

里山の放置荒廃が、野生動物の行動圏の変化に関係しているのではないか、という議論がなされ、日本の林業もこの問題と関わっている、ということも指摘されています。

聖域であった山を切り開き、実のならない人工林や団地に変え、野生獣の棲家を奪ったのは紛れもない事実です。

また、生活変化に伴う耕作地の放棄、農業の機械化で圃場での人の活動時間の減少等々、複合的な環境変化が考えられますが、野生動物と人の生活域との棲み分けを真剣に考えるべき時が来ている様に思います。

農業は、何千年間も多様な野生生物を資源として活用し、共生技術を開発してきた歴史をもっています。

栽培作物のみを残し、他の生物を害虫や雑草、害獣として完璧に排除する近代化農法は人類史のなかでも戦後のほんの50年間に過ぎません。

本来 農業生産は 工業生産のように人工的に製品を造るのではなく、人間が生物のいのちを育(はぐくむ)ことにあり、その成長に必要な環境条件を整備し管理する結果として、自然からの恵みを享受出来るという、農業本来の姿を確立することが共生の第一歩です。

サル出没グラフ

左のグラフは今年1・2月の出没状況です。

西谷周辺は14日、伊賀竜口周辺は10日と「ダントツ」に多く、1月はほとんど西谷、伊賀竜口両周辺で過ごしています。

今後、根気よくグラフを重ねて行けば季節による遊動ルートが見えてくるかも？。

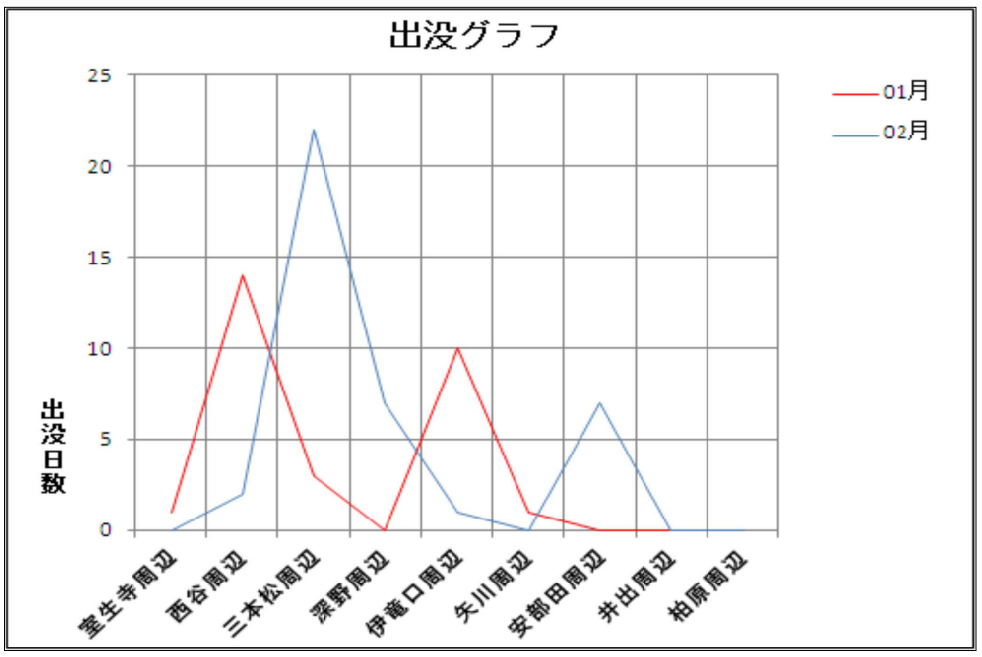
地域によってサルが好きな食物の多い処、少ない処が見えてきます。

地域の防除の適否もわかって来ます。

季節的にどこを利用し、どこで被害を出すか、その群れの遊動ルートがわかってくると思います。

特定地域における追い払いや防除が、他の地域への依存を強めるなど予測することもできます。

B群の傾向として、森の中に餌が豊富な初夏や秋は農地への出没が減るが、森の中の餌が少ない冬や真夏は農地への出没が増えています。



野生動物・生態系

生態系は、地球上に生命が誕生して以来、40億年という長い年月を経て形成されたものですが、様々な人間活動によって多数の生物が絶滅し、生態系破壊が急速に深刻化しています。

例えば、明治38年（１９０５）ニホンオオカミが絶滅したことにより、草食系の野生動物が大繁殖し、人間や農作物に大きな被害を与えています。

人間は、自らの身勝手で、人間よりずっと前から地球に生きてきた野生動物を、絶滅の危機に追いやっています。

野生動物の絶滅は、生態系のバランスを崩し、人間の生存を危うくすると言っても過言ではありません。

一旦、絶滅すると再生は不可能と言うことを、肝に銘じるべきです。

被害をもたらす野生動物でも例外ではなく、人類共通の財産として、次世代に引き継いでいかなければなりません。

生態系に悪影響を及ぼすと言えば、外来種問題があります。

外来種全てが、新しい環境に適応し野生化するとは限らず、むしろ稀だと言われていますが、野生化し被害が出だすと、極めて深刻な問題をもたらします。

外来種が引き起こす問題として、この地方では農林産業等への被害が挙げられます。

ヌートリア、アライグマの被害がそれに当たり、被害域も拡大しています。

他に、遺伝子の撹乱、感染症どが挙げられます。

外来種問題は、もともと人間が自分達の利益のために、海外からの動物の輸入を続けてきたことが原因です。

シカ大量捕獲装置

近年シカが大繁殖しています。

これは、温暖化や、狩猟者が高齢化で減ったことなど、複合的な要因が影響していると思います。

要因の一つに人間の身勝手な営みも影響していると言うことを忘れてはいけないと思います

異常な増え過ぎは、農林作物被害や生態系の崩壊に繋がります。

これに伴い宇陀市では、一度にシカを大量捕獲できる「ドロップネット方式」のわなを導入。大和竜口で試験的に捕獲を実施しています。

高度な技術が不要で効率的なため全国的に注目されています。

シカ一網打尽

ドロップネット方式は、兵庫県森林動物研究センターが２００８年に考案した。

１８メートル四方に高さ２・５～３メートルの支柱を設置し、上部に網を広げる。

一定期間網の下にエサをまき、多くのシカが訪れるようにした後、カメラで観察しながら遠隔操作で網を落として多数のシカを一気に捕獲する。

同センターでは一度に２５頭捕獲した実績もある。　（京都新聞）

写真＝大和竜口で

MD訓練に参加して

名張市 市議会議員・MDC 会員
常俊　朋子

2月6日（月）、モンキードッグ訓練日は天候が悪く、急きょモンキードッグ指導者の碇訓練士による犬の「しつけ」と「訓練」についての講義を受けました＝写真。

碇訓練士は、飼い主との信頼関係が大切。つまり、人間と犬との絆づくり。高度な訓練になれば、犬が飼い主を認め「絶対服従」が出来ることで「訓練が身に付く」とお話し下さいました。

飼い主も、命令するときにきちんとした態度であるか。今、犬が何をすべきなのかを伝えられているか。犬は、解っているのにしない時があります。その時が大事で、「お座り」ならお座りはどんな形をすればいいのか。

「お座り」と言ったら「座る」という形をきちんと教えて出来るように癖をつけること。「よし」というまで動かないこと。良い癖がつけば、感謝の気持ちで思い切り褒める。

犬の純粋さを信じて、やる気が起こる訓練をしていく事と説明されました。「おやつ」で訓練していくことも一つの方法ですが「おやつ」が「ある。なし。」に関わらず、飼い主の支持が忠実に守れるように訓練を高度なものにしていくことが、しつけであり、訓練だと教えて下さいました。

今、倶楽部のメンバーたちは、犬たちのレベルアップを目指して再訓練にも取り組んでいます。

息の長い活動にしていくためのチャレンジです。

サルの個体調査ついて

宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会では、サルの個体調査を「2月29日～3月9日」にかけて行われます。

主に群れの頭数や年齢構成、新群の発見などの調査です。

冬のこの季節、日本のあちこちで調査が行われます。

なぜ、この季節に調査を行うところが多いのか。

山の木々が落葉し、視界が良くなり、サルが見つけやすくなるから。

また、秋から冬にかけてはサルの交尾期で、発情して鳴き声を出すので群の発見がしやすい。

発情した個体は顔やお尻が真っ赤になって、オス・メスも見分けやすい。ということでこの季節に行われることが多い。

年齢を判断するのは、性別を見分けるよりむずかしいそうです。

サルの年齢はお尻の色などで判断するそうで、子どもは白っぽく、大人になるにつれて、赤くなっていくそうです。

この調査は、今後サルの適正管理に欠かせない資料となります。